

日系アメリカ人のアイデンティティーに関する日米大学生の見解

ジリアン・太田

カリフォルニア州立大学モントレイ校

要旨

私達はアメリカで生まれ育った日系アメリカ人で、日本語・日本文化を大学で学び日本へ留学する経験も得られた。その過程で、日本の学生やアメリカの学生は日系アメリカ人をどのように見ているのかもっと深く知りたいと思った。そこでこの研究では、日米の大学生は日系アメリカ人のアイデンティティーについてどのような見解を持っているのか、また彼らの見解はどのように形成されているのかについて調べることにした。日本の大学生30名、アメリカの大学生32人名に対してアンケート調査を行い、その結果アメリカの学生は日系アメリカ人は学問的に優秀で、礼儀正しく、働き者であるという見方が強いのにに対して、日本の学生はただ働き者という認識があることがわかった。また、日本の学生は日系アメリカ人は日本とアメリカの文化に強い絆を持つことが大切だとしているが、アメリカの学生はあまり大切だと思っていないこともわかった。しかし、日本の学生もアメリカの学生も日系アメリカ人は日米両国の文化を誇りに思うべきだとしている。また、言語に関しては日米の学生共に日本語と英語の両方を流暢に話せる必要はないとし、アイデンティティーは個人が自由に選べるべきだという見解を持っていることもわかった。また、日系アメリカ人に対する認識は両国の学生ともに知っている日系アメリカ人を通して形成されているようである。しかし、日本の学生はテレビや映画等が彼らのイメージ形成に影響していることがわかった。

はじめに

1841年から日本人はアメリカに移民し、第二次世界大戦前にはアメリカの政府は日系人を強制収容所に送り、日系人は経験をした。生活し、アメリカの文化に生活は厳しく、差別ま味わった。しかし、現在の若者はこのような歴史を知らない。アメリカの大学生は日系アメリカ人についてどのような見解を持っているのか。日本人の大学生は日系アメリカ人についてどのような認識を持っているのか。様々な角度から日系アメリカ人のアイデンティティーについて調べてみることにした。

1. 研究の重要性

なぜ私がこの研究をしたかという、私が日系アメリカ人で日系アメリカ人はどのように見られているのか理解したいと思ったからである。また、私が日本に留学していた時、日本の大学生の日系アメリカ人に対する意識の低さに驚いた。そこで日系アメリカ人のアイデンティティーについて日本の大学生とアメリカの大学生がどのような見解を持っているのか、また彼らの見解はどのように形成されているのかについて研究し

てみたいと思った。

2. 研究質問

1. 日米大学生は、日系アメリカ人のアイデンティティーについてどのような見解を持っているのか。
2. 日米大学生の日系アメリカ人のイメージ形成にはどのような要因が影響されているのか。

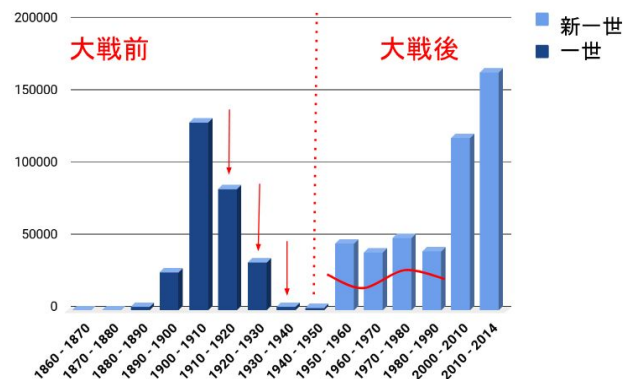
3. 研究背景

3.1. 日系アメリカ人に関する定義

まず始めに、日系アメリカ人は日本以外の国に移住し当該国の国籍という人の事で、一世、二世、新一世に分けられる。一世とは第二次世界大戦の前にアメリカに移住した日本人のことで。新一世は第二次世界大戦後、アメリカに移住した日本人のことをいう（新谷 2001;津田 2009）。二世は一世の子供たちのことを指し、新一世は第二次世界大戦後、アメリカに移住した日本人のことをいう（新谷 2001）。

3.2. アメリカに移住した日本人の統計

図1:アメリカに移住した日本人の統計



これは、第二次世界大戦前から大戦後のアメリカに移民した日本人の統計を示した物である（図1）。大戦前と大戦中に一世の移民は急激に衰退してるのがわかる。しかし、大戦後に新一世の移民の数はほぼ一定してる（スピッカード1996）。

3.3. 新日系アメリカ人 移住者 (米国)

日本の国勢調査からわかるように、日本人の移民者は2000年から急激に増えている。一世の人口より新一世の人口の方が多いことがわかる(日本の国勢調査2017)。

3.4. 世代の差

第二次世界大戦前にアメリカに移民した人は一世、第二次世界大戦後にアメリカに移民した人は新一世と呼ばれる。そして、世代により経験に違いがある。例えば、一世は収容所に収監された経験を持つてるが、新一世はその経験がない。また、二世、三世はアメリカの文化に精通しているが、新一世はアメリカと日本の文化の両方をよく理解している。労働に関しても一世が肉体労働的な仕事をしていたのと異なり、新一世、二世、三世は事務系の仕事につくことが多い（津田2015;山城2017）。

3.5. アメリカ社会への同化

第二次世界大戦後日系アメリカ人は、アメリカの主流社会に同化することを重視し、学問に力をいれた。そのため日系アメリカ人の一世は大半、高校や大学を卒業している。更に、日系アメリカ人の同化が進むにつれ、学業成績は高いとはいえないが修士、博士等の学位を持つ人が増えている（北野 1962; 増田 1970; マトバ-アドラー 1998）。また、1967年までに異種族混交は違法だったが、白人アメリカ人と結婚し子

供を生むことも大事なことであった（ハール1997）。

3.6. 既成概念と差別（アメリカ）

それでは、第二次世界大戦後、日系アメリカ人は学問的な業績と財政的成功があったため、アジア系アメリカ人は理想的なマイノリティで、勤勉、静か、利口等理想的な生徒のイメージがある（北野1962;新谷2001;シム1998）。そのため、学問に関する非現実的な期待が持たれたがその期待にそえない日系アメリカ人へのサポートなかった。キャリアの面でもある程度まで昇進するとそれ以上の昇進はできなかつた（新谷2001;マトバ-アドラー1997）。

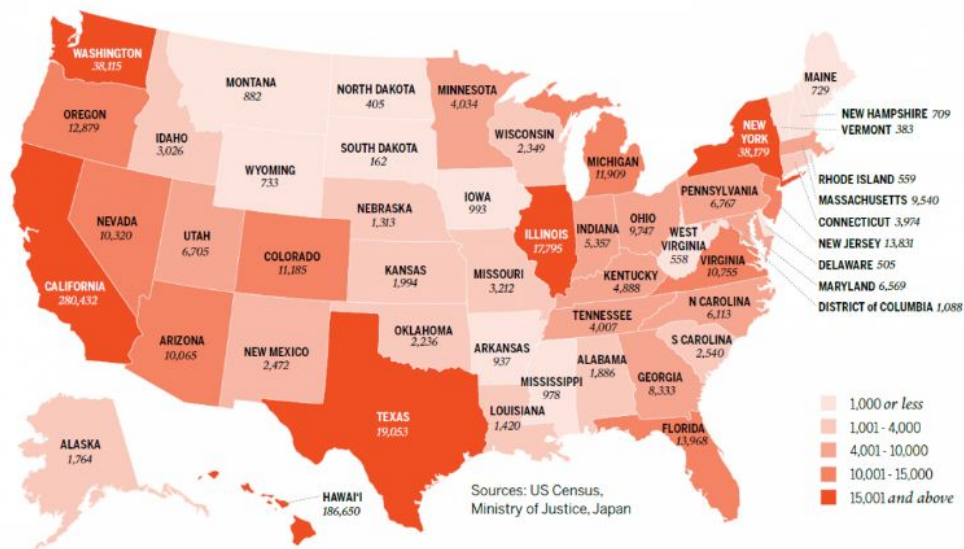
そして、第二次世界対戦が勃発し、1942年にルーズベルト大統領がアメリカ行政命令を出し、120万人もの日系アメリカ人が強制収容所に収監された（新谷2001）。既成概念と差別に対して抗議した人として知られているのがフレッド・コレマツである。彼は行政命令9066番に逆らい逮捕され、アメリカの最高裁判所に訴訟をおこしたことで知られている。コレマツは敗訴という結果に終わったが、彼の勇気ある行動は歴史に記されている（"ライフタイム"n.d.）。またJACL、いわゆる日系アメリカ人市民同盟は、アジア系アメリカ人のため公民権と人権を確保し保護する団体で、日系アメリカ人のコミュニティの継続を保つための団体でもあり、疎外される人たちを擁護している。JACLはさらに異人種間結婚禁止の法律の無効を強く支持した。つまり、日系アメリカ人と白人の結婚は禁止されていたが、この裁判で勝利することにより、異人種間の結婚が可能になったということである（日系アメリカ人市民同盟2017; U.S. National Archive & Record Administration 2017）。

また、1988年の市民自由法によって、アメリカの政府は、第二次世界大戦中に収監した日系アメリカ人に一人つき、2万ドルを支払い日系アメリカ人を差別扱ったことを謝罪した。JACLはこの市民自由法を勝ち取るために力を注いだことでも知られている（日系アメリカ人市民同盟2017; U.S. National Archive & Record Administration

2017)。

3.7. 日系アメリカ人の人口統計（アメリカ）

図2: 日系アメリカ人の人口統計（アメリカ）



EAST-WEST CENTER
COLLABORATION • EXPERTISE • INNOVATION

SPF THE SASAKAWA PEACE FOUNDATION

アメリカでは5.7%がアジア系アメリカ人で、アジア系日本人の中では6番目に位置している（アメリカの国勢調査2016）。この図2から、カリフォルニア州、ハワイ州、ニューヨーク州とワシントン州に日系アメリカ人が多いことがわかる（山城2017）。

3.8. 日系アメリカ人の日本社会への同化

次に、いかに日本語を流暢に話すか、日本の文化を知っているかには関係なく日

系アメリカ人は他の日系人より日本社会に受け入れられやすい。また日本にいる日系アメリカ人は自分のアメリカ人らしいところが美点だと思っている。それは日本人は米国に親近感を持っているためポジティブなイメージがあるからであろう。日本に住んでいる日系アメリカ人は大学に留学している学生や英語教師等の事務な仕事をしていることが多い（津田2009;山城2017）。

3.9. 既成概念と差別（日本）

一方、日系アメリカ人は日本ではいじめにあうこともある。それは日本語がよくできなかったり、日本の文化をあまり知らないという点からおこるようだ。また日本では白人の方が英語の先生として雇われやすいという事実もある（山城2017;リエ2001;津田2009）。

3.10. 日系アメリカ人の人口統計(日本)

この14年間で日本での日系アメリカ人の人口は増加している。2000年に日本に住んでいたアメリカ人44,856人の中で12.50%は日系アメリカ人だが、2014年には51,256人のアメリカ人の中で15.04%が日系アメリカ人である（日本の国勢調査2017）。

3.11. 日系アメリカ人のイメージ

アメリカでの日系アメリカ人のイメージは「丁寧」で、「働き者」で、「単一民族」が、日本では「きれい」で、「バイリンガル」で、「ハーフ」というイメージ（山城2017）。

3.12. 文化の価値観と特徴

日本とアメリカでは文化の価値観に違いがある。日本の特徴にあげられるのは、「受けた恩を大切に思う」、「義務を果たすことを大切にする」、「名誉を重んじ

る」、「他人への依存度が高い」等があげられている。一方、アメリカでは「個人主義」、「平等」、「自己主義」等の特徴があげられる（マトバーアドラー1998）。更に、ケンディス、マトバーアドラーによると、日系アメリカ人に受け継がれている日本文化の価値観と特徴としてあげられるのが「我慢、頑張れ、遠慮」で、この価値観が日系アメリカ人のアイデンティティと繋がり、モデル・マイノリティの始まりになっているのではないかと伺われる（1998）。我慢、頑張る、遠慮が「良い労働理論」、「礼儀」、「規則を順守」等を重んじることに繋がっている（ケンディス1989;マトバーアドラー1998）。

3.13. 国民的アイデンティティーvs.民族的アイデンティティー

さて、ここで日系アメリカ人にとって国民的アイデンティティと民族的アイデンティティの両方のアイデンティティが大切になってくる。国民的アイデンティティとしてはアメリカという国の一人という意識から自民族中心主義的な見解を保持するが、それと共に日系という民族グループに属しているという意識が彼らのふるまい、態度、価値観に影響し、その価値観が同化過程において大切な要因になる（ボラフィ2003; シース・モース2009;増田1970）。また、アメリカ人に対する人の認識としては「白人」、「キリスト教徒」、「英語を話せる」、「アメリカ生まれ」等があげられる（シース・モース2009）。一方、日本人への認識には、単一民族、礼儀正しい、物静か、尊敬の念等がある（ヘンドリ2006）。

3.17. 日系アメリカ人のアイデンティティー

さて、日系アメリカ人のアイデンティティに影響する3つの要素には（1）容姿、（2）世代にわたる日本の隔たり、（3）日本語や日本文化に関する知識の有無等があげられる（山城2017）。では、スー&スーは2つの文化を持つ人は、アイデンティティ・クライシスを経験することが多々あると主張している。つまり、それはどちらの文化に属しているのかわからず混乱すると共に、どちらの国の文化からも孤立しているように見え、自己喪失感を覚えることである。さらに、スー&スーはアジア系アメリカ人のアイデンティティを三つに分類している。一つは伝統主義者でアジアの国のみに価値を見出している人、二つ目はマージナル・マンで西洋の国のみに価値を見出す

人、三つ目はアジア系アメリカ人で両国の価値観を見につけている人である（スー&スー 1971; スー&スー 1972）。

4. 研究方法

さて、ここで研究方法について説明する。アメリカの大学生32名、日本の大学生30名に日本語と英語でアンケート調査をオンラインで行った。また、62名の中で日系アメリカ人だと答えた学生は10名、3名が「ハーフ」だと答えた。

5. 研究結果

5.1. 研究質問1:日米の大学生は日系アメリカ人のアイデンティティーについてどのような見解を持っているのか。

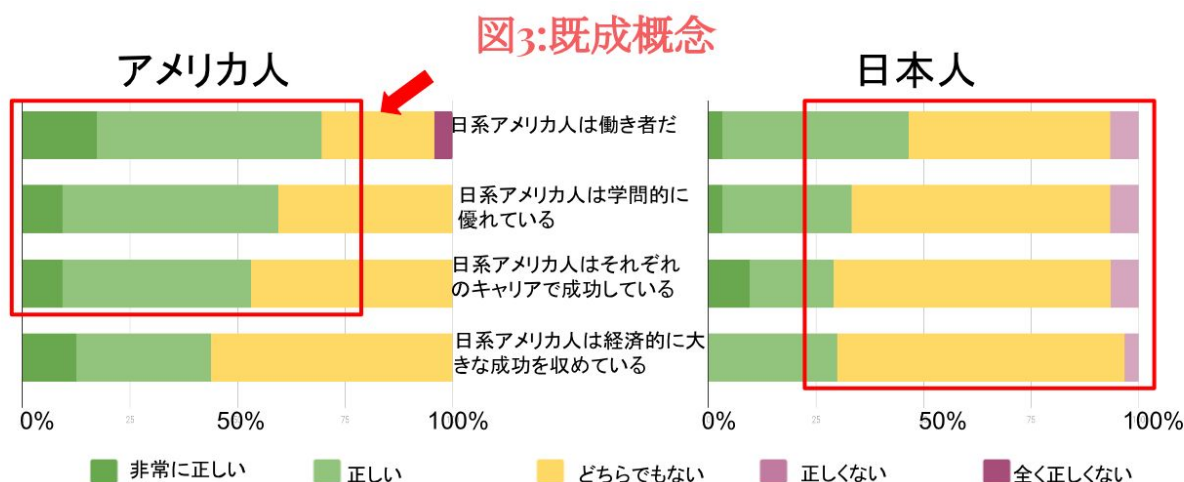


図3からわかるように、日系アメリカ人に対する表現に対して正しいと思うか思わないか聞いたところ、アメリカの学生は日系アメリカ人は「働き者」、「学問的に優れている」、「キャリアで成功している」と思っているが、日本人は「どちらでもない」を選んだ学生が多かった。

図4:既成概念と差別

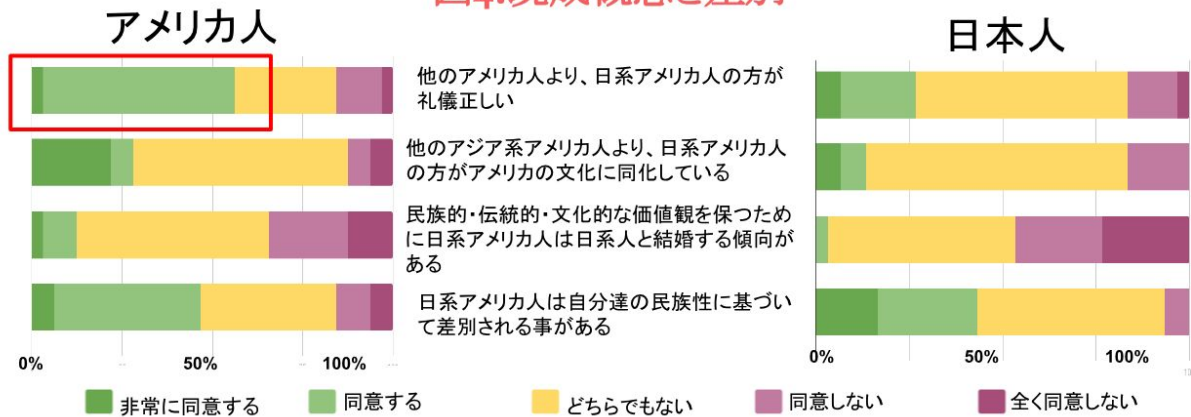
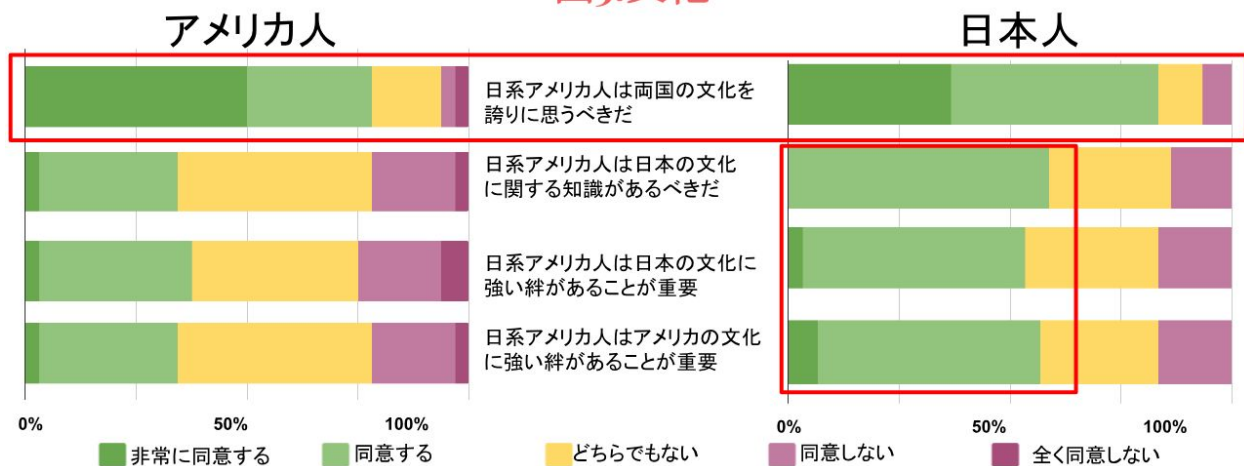


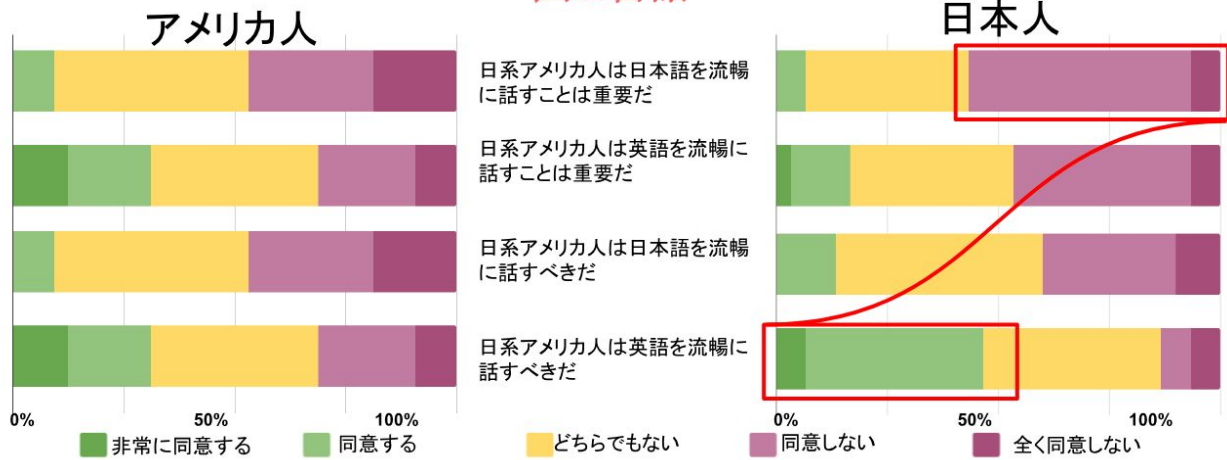
図4からわかるように、半数以上のアメリカの学生は、日系アメリカ人は他のアメリカ人より礼儀正しいと考えておいるが、日本の学生は「どちらでもない」と思っている学生が多いことがわかった。

図5:文化



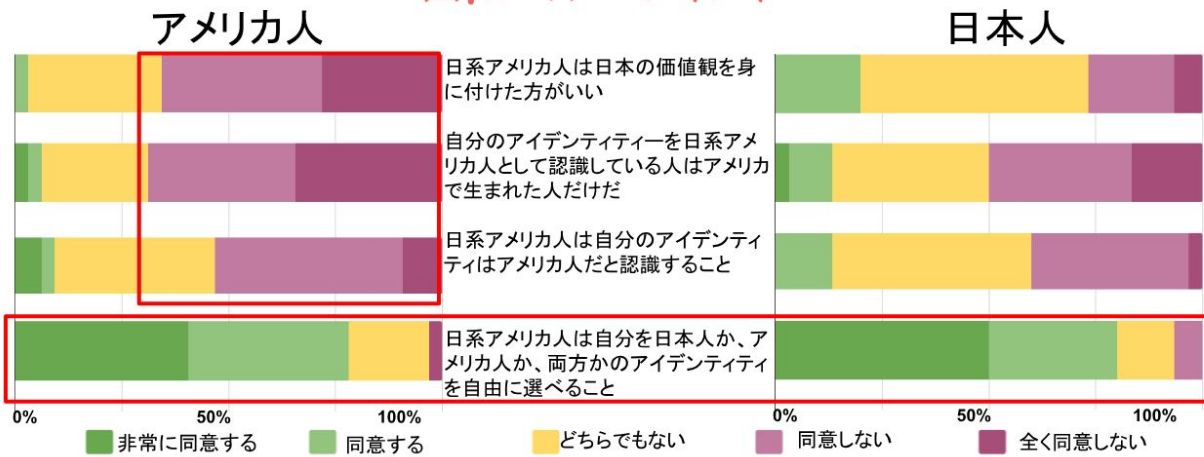
日系アメリカ人は、どちらの国の文化のことをよく知り、絆が深いのだろうか。図5からも分かるように、両国の学生共に日系アメリカ人は両国の文化を誇りに思うべきだと考えている。また、日本の学生の方が、日系アメリカ人は日本とアメリカの両方の国の文化に強い絆がある事が重要だと考えていることがわかった。

図6:言語



両国の学生共、日系アメリカ人は日本語と英語を流暢に話すことを重要だとは思っていない。しかし、日本の学生の方がアメリカの学生より日系アメリカ人は英語を流暢に話せるべきだと思っている（図6）。

図7:アイデンティティー



日系アメリカ人の持つべきアイデンティティーに関しては、アメリカの学生は自分のアイデンティティーはアメリカ人だと認識することに対して、過半数が重要ではないと答えている。しかし、両国の学生は、日系アメリカ人は自分のアイデンティティーはアメリカ人として認識していることが非常に重要であり。また自分のアイデンティティーを

日系アメリカ人として認識している人はアメリカで生まれた人だけとは考えていないようだ（図7）。

図8:ワードクラウド

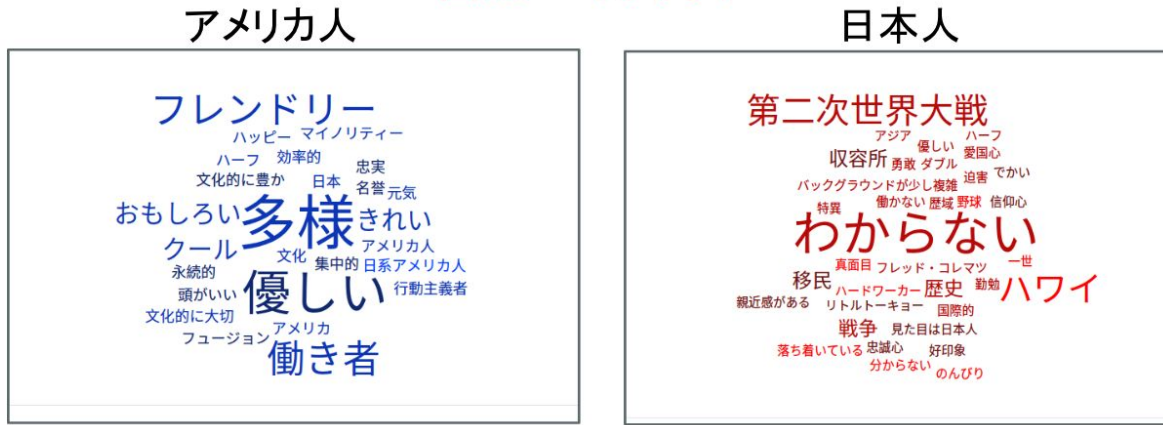


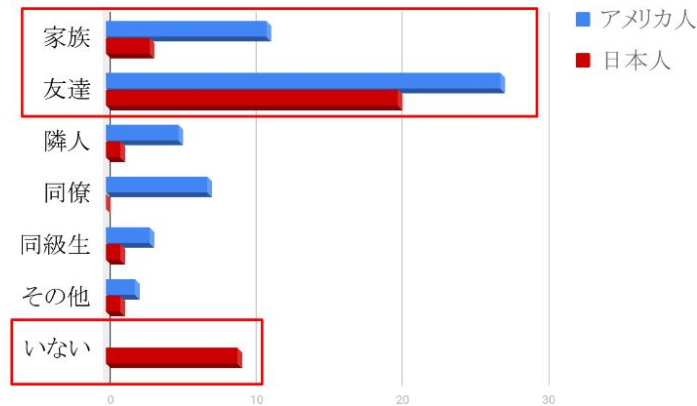
図8のワードクラウドからもわからように、アメリカの大学生に多く書かれたのが「多様」、「優しい」、「働き者」で、日本人の大学生の場合は「わからない」、「第二次世界大戦」、「ハワイ」だった。このことから日本の学生は日系アメリカ人についてよく知らないということが伺われる。

5.2. 研究結果1のまとめ

両国の学生は、日系アメリカ人は日本とアメリカのどちらの国の文化も誇りに思うべきだと思っていることがわかった。また、アイデンティティに関しては個人が自由に選べるべきだという見解を持っている。更に、日本の学生は、日系アメリカ人は日本とアメリカの文化に強い絆を持っていることが大切だとしているが、アメリカの学生はあまり重要だとは思っていないこともわかった。興味深かったのはワードクラウドに現れた日系アメリカ人への認識だ。アメリカの大学生は日系アメリカ人に肯定的なイメージを持っている。しかし、日本の学生は日系アメリカ人のことをよく知らず、アメリカと日本の戦争に巻き込まれた日系アメリカ人の深い歴史と繋がっているのではないかと考えられる。

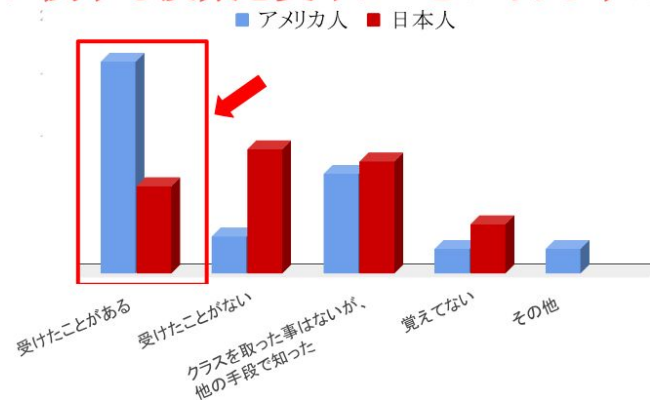
5.3. 研究質問2:日米大学生の見解にはどのようなことが影響しているのか。

図9:日系アメリカ人の知りあいがいる場合、その人(たち)とはどんな関係ですか。



「日系アメリカ人の知りあいがいる場合、その人とはどんな関係か。」という質問に対して、アメリカの大学生全員が日系アメリカ人の知りあいがいると答えたが、日本の大学生は「いない」と答えた。つまり、日本にはあまり日系アメリカ人と接する機会がないということだろう（図9）。

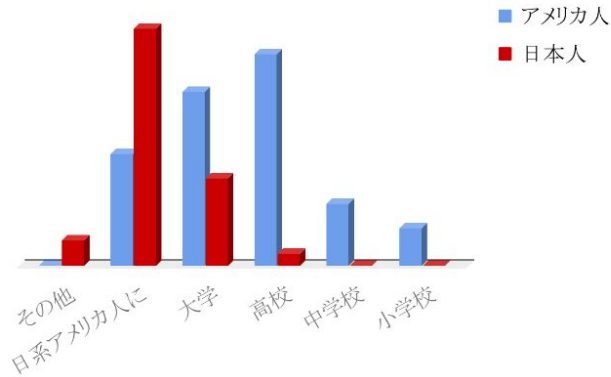
図10:日系アメリカ人の歴史、問題やアイデンティティに関する授業を受けたことがありますか。



次は日系アメリカ人の歴史、問題やアイデンティティに関する授業に関してはアメリカのほとんどの学生は授業を受けたことがあるのに対し、日本の学生は学校で学ぶ

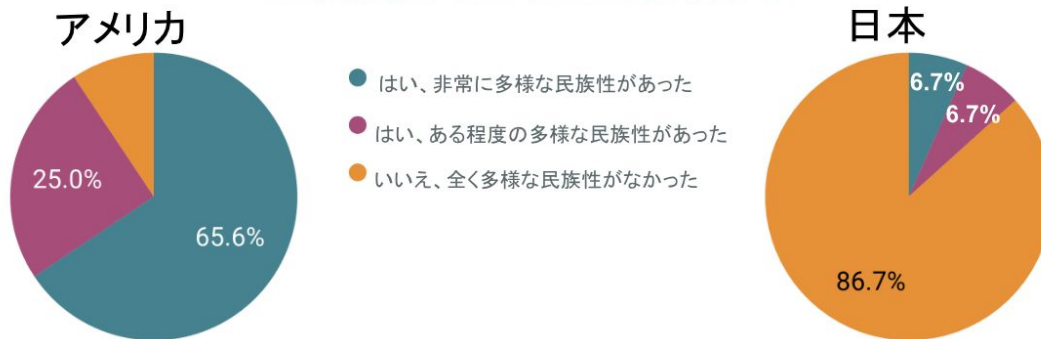
機会がほとんどないようだ（図10）。

図11:日系アメリカ人に関する授業を取った事があると答えた方は、いつそのクラスを取りましたか。



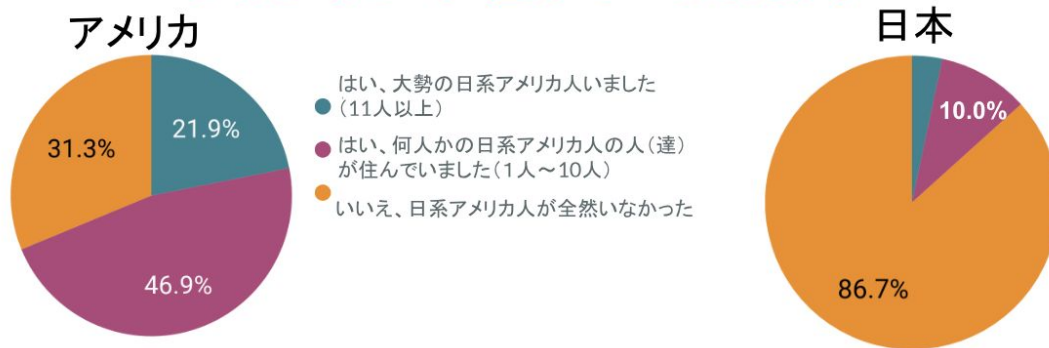
また日系アメリカ人に関する授業はアメリカの学生は高校や大学で学ぶが日本の学生は学ぶ機会がない（図11）。

図12:あなたは民族的多様性がある地域社会で育てられましたか。



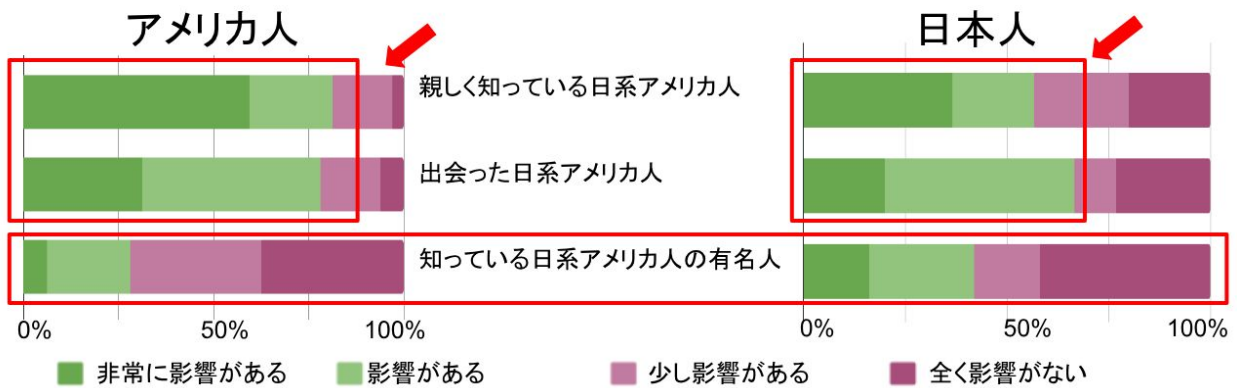
また、アメリカとは異なり、大多数の日本の大学生は民族的多様性がある地域社会で育っていないと答えている（図12）。

図13:あなたが育った地域には日系アメリカ人の人々が住んでいましたか。



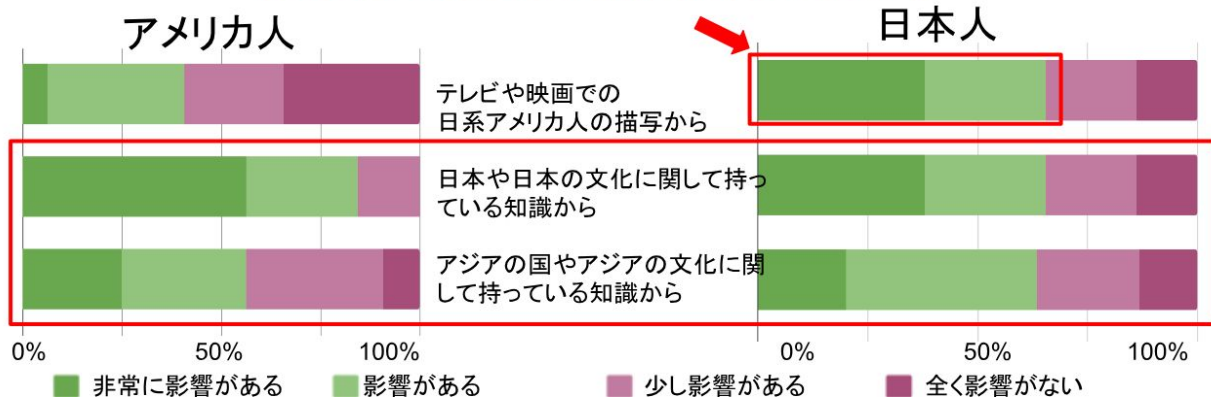
また、ほとんどの日本の大学生は育った地域には日系アメリカ人が住んでいなかったと答えたが、7割のアメリカの大学生は日系アメリカ人が住んでいたと答えている(図13)。

図14:日米大学生の日系アメリカ人のイメージ形成にはどのような要因が影響するのか。



では、図14からわかるように、日系アメリカ人へのイメージはどのような要因が影響するのだが、両国の学生は知っている人、出会った人から形成されていることがわかる。また、有名人からの影響はあまりないこともわかった。

図15: 日米大学生の日系アメリカ人のイメージ形成にはどのような要因が影響するのか。



更に両国の大学生は、日本やアジアの国の文化に関して持っている知識が影響していると答えている。また、日本の大学生の方が テレビや映画での日系アメリカ人の描写から影響を受けていることがわかった（図15）。

5.4. 研究結果2のまとめ

両国の大学生の日系アメリカ人への見解は、知っている日系アメリカ人から形成され、また持っている日本の文化からも影響されている。アメリカには身近に日系アメリカ人がいるため、彼らから学ぶ機会も多く、学校でも日系アメリカ人の歴史等から学ぶ。しかし、日本の学生は日系アメリカ人に会うことも彼らの歴史を学ぶ機会もない。そのため、日本の学生の知識やテレビのドラマや映画等のイメージはメディアから影響されているようだ。

6. 結論

アメリカの大学生は日系アメリカ人に対しての偏見は少ない。また、日系アメリカ人に対する「既成概念」や「差別問題」に関する知識も多いようだ。それは日系アメリカ人の歴史について学校で学んだり、身近に日系アメリカ人がいるからだと考えられる。つまりアメリカは多文化社会であり異文化理解は大切だという認識や教育もされている。しかし、日本の学生は、日系アメリカ人の歴史は知っているものの日系アメリカ

人と接する機会もなくあまり日系アメリカ人については知らない。つまり、日本の大学生は、一世日系アメリカ人の経験に集中しがちだ。もっと多文化に触れる色々な機会をつくり、交流を深め、日系人の多様性を理解してもらいたいと思う。

7. 研究の限界点と将来の研究課題

最後にこの調査ではアメリカの大学生の回答者の大部分はカリフォルニアの出身で。カリフォルニア州には日系アメリカ人が多い。そのため、この研究結果一般化する事はできない。将来の研究課題としては日系アメリカ人に限らず、日系メキシコ人や日系韓国人等、あらゆる日系人に関してのアイデンティティーを追及したい。

参考文献

- Bolaffi G., Et al. (2003). *Dictionary of Race, Ethnicity & Culture*. (Ed.). London, England: SAGE Publications Ltd.
- Goodman, R., Et al. (2003). *Global Japan: the experience of Japan's new immigrant and overseas communities*. London; New York: RoutledgeCurzon.
- Hall, R.E. (1997). *Eurogamy among Asian-Americans: a note on Western assimilation*. *The Social Science Journal*, 34(3), 403+ Retrieved from go.galegroup.com/ps/i.do?p=AONE&sw=w&u=csumb_main&v=2.1&id=GALE%7CA19909460&it=r&asid=6824b0493a346495013bc76be57dee86.
- History.com Staff. (2009). Japanese Internment Camps. Retrieved April 03, 2018. From <https://www.history.com/topics/world-war-ii/japanese-american-relocation>
- Hendry, J. (2006). *Understanding Japanese Society*. London: RoutledgeCurzon
- Kitano, H.L.. (1962). Changing Achievement Patterns of the Japanese in the United States. *The Journal of Social Psychology*, 58, 257-264.
- Kuroki, M. (2013). 日系アメリカ人のアイデンティティー変容—エスニシティ、ジェンダー、国家を超えて—人間文化研究. 36, 79-95.
- Lie J. (2001). *Multiethnic Japan*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Matoba Adler, S. (1998). *Mothering, Education and Ethnicity: The Transformation of Japanese American Culture*. Ng, F. (Ed.). New York, NY: Garland Publishing, Inc.
- Niiya, B. (Ed.). (2001). *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present*. New York, NY: Facts on File, Inc.
- Okamoto, D. (2014). *Redefining Race: Asian American Panethnicity and Shifting Ethnic Boundaries*. New York: Russell Sage Foundation.
- Sellers, R.. (1998). Multidimensional Model of Racial Identity: A Reconceptualization of African American Racial Identity. *Personality & Social Psychology*, 2(1), 18-22.

- Sellers, R.. (2013). The Multidimensional Model of Black Identity (MBBI).
Measurement Instrument Database for the Social Science. Retrieved from
www.midss.ie
- Shim, D. (1998). From yellow peril through model minority to renewed yellow peril.
Journal of Communication Inquiry, 22(4), 385+ Retrieved from
http://go.galegroup.com/ps/i.do?&id=GALE|A21171155&v=2.1&u=csumb_main&it=r&p=AONE&sw=w
- Theiss-Morse, E. (2009). *Who Counts as an American?: the Boundaries of National Identity*. Cambridge, NY: Cambridge University Press.
- Togami, C., & Hansen, A. (1993). *The Public Historian*, 15(1), 114-117. Doi:
10.2307/3378055
- Tsuda, T. (2003). *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York, NY: Columbia University Press
- Tsuda, T. (2009). *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Tsuda, T. (2015). Recovering heritage and homeland: ethnic revival among fourth-generation Japanese Americans. *Sociological Inquiry* 84(4), 600-627
Retrieved from <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/soin.12095/full>
- Tsukuda, Y. (2017). 日本の大衆メディアにおける日系人の表象. 成城法学. 教養論集, 27, 69-85. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/40007361796>
- Yamashiro J.H. (2017). *Redefining Japaneseness: Japanese Americans in the Ancestral Homeland*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

